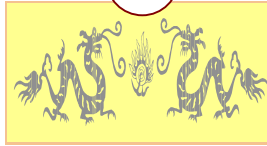


郷土摂津 いにしえ通信

第92号



平成17年12月1日

発行

摂津市教育委員会 生涯学習部 生涯学習課

〒566 - 8555 摂津市三島一丁目1 - 1

(06)6383 - 1111 (072)638 - 0007

ホームページアドレス

http://www.city.settsu.osaka.jp/



ふるさとの川「淀川」

～川は流れる悠久の歴史の中で～

人類が出現する以前の原始・古代・
中近世から現代まで時代別に淀川
と摂津市の関わりに迫ります。

第9回

福原遷都と淀川 打倒平氏の機運がたかまりつつある中で、治承元年（1177）に後白河法皇の近臣、藤原成親・憎西光・平康頼・憎俊寛らが、京都東山の鹿ヶ谷に密会して進めていた平氏討伐の陰謀が露顕しました。このような反対派の動きに清盛は断乎たる反撃を加え、後白河法皇の院政政権との対立は激しさを増しました。治承3年11月には、清盛はクーデターを決行し、関白基房以下39人の公卿など法皇近臣の官職を奪い、ついに後白河法皇を鳥羽殿に幽閉して、中央政界の反平氏勢力を一掃しました。翌4年2月には、高倉天皇にかえて、清盛の娘徳子の産んだわずか3歳の安徳天皇が即位します。このあまりにも武断的な行動は、かえって反平氏勢力に結束を急がせることとなりました。

この治承4年の4月に、後白河法皇の第二皇子以仁王は平氏追討の令旨を諸国の源氏に発し、源頼政とともに兵を起しました。この挙兵は5月26日に以仁王・頼政が敗死し一応鎮圧されましたが、反平氏勢力の爆発に驚いた清盛はあわてて福原（神戸市）への遷都を強行しました。福原は平氏一門の別荘地であり、清盛による大輪田泊の修築以来、貿易の中心として繁栄し、平氏政権の経済的基礎の一翼をになう日宋貿易の根拠地ともなったところです。6月2日、安徳天皇や後白河法皇・高倉上皇をはじめ、公卿の多くが、京都を離れて福原へ向かいました。その状況を九条兼実（右大臣、のち関白・太政大臣）の日記『玉葉』では、「二日未癸、天晴、卯刻、入道相国（清盛）福原別業に行幸す。法皇、上皇、同じく、以て渡御す。城外の行宮、往古その例ありといえども、延歴以後、すべてこの義なし。誠に希代の勝事と謂うべきか。（中略）八条連より草津に至る、武士数千騎、二行に轡を並べ幸路を夾す。（中略）今夜大物に就き、明暁福原に御す。」と記しています。一行は鳥羽の草津で船に乗り、淀川を下りました。

その夜は大物（尼崎市）に着くとありますが、このとき兼実は京都に残って同行していませんでしたので、泊まったのは『百鍊抄』にみえるとおりの「寺江頓宮」とするほうが正確であろうと思われます。頓宮は、かりみや、行宮のことで寺江頓宮は、清盛の参謀格として活躍した五条大納言藤原邦綱の別荘「寺江山荘」で、このころ淀川を上下する貴族たちの宿所に供された例が多く見れます。その地は尼崎市内の神崎川にそった今福に比定されており、大物よりも上流です。



京と福原の位置

（元木泰雄『平清盛の戦い』より）

（裏面へつづく）

急な遷都のありさまは、『平家物語』(巻第5 都遷^{みやこうつり})にも、「家々は賀茂河・桂河にこぼちいれ、筏にくみうかべ、資材雑具舟につみ、福原へとてはこび下す。ただなりに花の都み中になるこそかなしけれ。」と記していますが、あわただしい船の動きが淀川筋に展開されたことでしょうか。この年の西日本はひでりがつづき、淀川の流れも減水がひどく、京都と福原を往来する人々の心をより一層いらだたせたことでしょうか。兼実は6月13日に淀川を下って福原へ向かいますが、『玉葉』の同日条に、「近日炎早、河水干乾す。淵変じて瀬と作る。船筏滞停し、いそぐといえど速かならず」と嘆じており、翌14日早朝にやっと寺江山荘に到着しています。

中山忠親(権中納言東宮大夫、のち内大臣)の日記『山槐記^{さんかいぎ}』によると、忠親は7月から11月までに、京都・福原を5度往復しています。1度目は7月18日から22日までで、往路は淀川の柱本(高槻市)で減水のため小船に乗り換え、夜通し下って吹田で夜が明けている。帰路は、「廿二口壬申、天晴、辰剋西宮を出で、守部へ向い歴覽す。午剋河尻に着く。終夜綱手を引かしむ。鳥飼に於て河水尽く。江口・柱本の止水に依るなり。船を鳥飼に留めて輿に乗る。」云々といい、西宮から守部を経て河尻(尼崎の神崎川河口)に着き、そこから船で夜通し綱手を引かせてのぼり、鳥飼で水枯れのため輿に乗り換えています。前代と同じく鳥飼付近の水量が著しく少ないことを示しています。いずれの往復でも淀川の水運を利用しています。11月21日には「午剋河尻に着き船に乗る。燭を乗り江口の上五、六町に至り、船に宿る」とあり、一津屋沿岸で船中泊したこともあったようです。

ところで、忠親の例でも知られるように、公卿たちの往来の激しさは、福原の都としての機能の不充分さがうかがわれます。もともとこの遷都は、清盛が特別な準備もなく突如として強行したもので、福原へ下った人々は居所も容易に定まらず、しかもその地は都を作るには平地もはなはだ足りない有様で人々は困惑して京に帰ることを切望しました。そのうえ、諸国には源氏がようやく蜂起して、清盛もついに復都を決意し、わずか半年で再び京都へ帰ることとなりました。天皇らは11月23日福原を出発、24日寺江に着き、25日寺江から淀川をのぼって木津殿に着くべきところ、風が烈しいため唐崎(高槻市)のあたりに停泊し、翌26日鳥羽の草津に着いて、夕刻入京しました。(『玉葉』、『山槐記』)

平氏政権の動揺による福原遷都は淀川筋の交通を繁くし、沿岸の住民も緊迫化した雰囲気をも船の往来から身に感じたことでしょうか。(撰津市史より)



第50回 埋もれた撰津市の歴史 千里丘陵と「大阪層群」



発掘調査で明らかになる埋もれた撰津市の古代に光を当てます。

大阪平野は西側を大阪湾、北側を北摂山地や千里丘陵、東側を生駒山地や枚方丘陵、南側を和泉山脈や泉北丘陵で囲まれています。これらの山々に囲まれた大阪平野は現状では陸地化していますが、長い歴史の中では、海であったり湖であったりしました。その中で大阪北部に位置する千里丘陵は古大阪湖・古大阪湾に300万～20万年前に堆積した粘土と砂礫とが幾重にも重なった地層(大阪層群)が六甲変動と呼ばれる地殻変動によって隆起した地形です。大阪層群そのものは大阪・京都・奈良・播磨の各盆地及び淡路島の丘陵地・台地の基部となるもので、千里丘陵は地質学的には大阪層群の模式地として知られています。北西の鳥熊山をピークに全体的には東に傾斜し市域では千里丘駅周辺に「八町池互層」と呼ばれる層が展開しています。丘陵内には幾筋もの河川による浸蝕作用で開折谷が発達し、小規模な扇状地など中位段丘を形成しますが、撰津市では市域の北西を除き古淀川の形成した沖積地に直接連続しているようです。沖積層の厚さは淀川と安威川の間で20mと最も厚く市域北西部でも1～5m程度です。沖積層の形成は主に古淀川の堆積作用ですが、安威川・山田川など千里丘陵を開折した川の堆積も複雑に入り混じっているものと思われます。(つづく)